

プレスリリース
2025年1月

東博が江戸 EDO

3～9月、上野の東京国立博物館に百花繚乱の江戸文化が花開きます

1603年に徳川家康が江戸に幕府を開いてから250年以上続いた江戸時代、江戸の町は人口100万人を超える大都市となりました。

2025年、東京・上野の東京国立博物館では、そんな江戸時代を舞台にした展覧会を複数予定しており、まさに「東博が江戸になる」年となるでしょう！春には江戸のメディア王と称された版元の蔦屋重三郎に焦点を当てた特別展『蔦屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児』を開催。夏には、江戸の庶民にとっても謎のベールに包まれた大奥の本当の姿に迫る特別展『江戸☆大奥』を開催します。さらには、江戸時代に浮世絵で育まれた木版画の技術を駆使した、現代アーティストによる「現代」の「浮世絵」をご覧ください。展覧会『浮世絵現代』、1万年以上前からの美の系譜を大迫力のイマーシブで体験いただく『イマーシブシアター 新ジャポニズム』と様々な切り口から「江戸の神髄」をお楽しみいただけます。知っているようで知らない、百花繚乱の江戸文化の世界によろこそ！

放送!   年企画

特別展「蔦屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児」

2025年4月22日(火)～6月15日(日) 東京国立博物館 平成館

特別展「江戸☆大奥」

2025年7月19日(土)～9月21日(日) 東京国立博物館 平成館

浮世絵現代

2025年4月22日(火)～6月15日(日) 東京国立博物館 表慶館

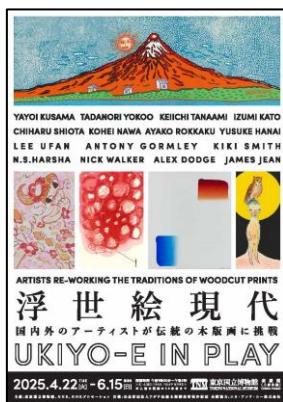
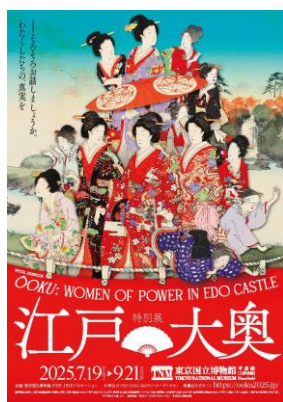
イマーシブシアター 新ジャポニズム ～縄文から浮世絵 そしてアニメへ～

2025年3月25日(火)～8月3日(日) 東京国立博物館 本館特別5室

展覧会公式サイト <https://tohaku-edo2025.jp>

展覧会公式SNS @tohaku_edo2025 「#東博が江戸2025」で投稿してください！

※詳細については決まり次第公式サイト等でお知らせします。



お問合せ「東博が江戸2025」広報事務局(共同PR内)担当:三井

TEL. 03-6264-2382 / E-mail. tohaku-edo2025-pr@kyodo-pr.co.jp

特別展 蔦屋重三郎

コンテンツビジネスの風雲児

SPECIAL EXHIBITION
TSUTAYA JUZABURŌ: CREATIVE VISIONARY OF EDO



江戸時代の傑出した出版業者である蔦屋重三郎は、喜多川歌麿、東洲斎写楽といった名だたる浮世絵師を世に出したことで知られています。蔦重は江戸の遊郭や歌舞伎を背景に、狂歌師や戯作者と親交を深めるなど、武家や町人、人気役者、人気絵師のネットワークを縦横無尽に広げながら、さながらメディアミックスによって出版業界に新機軸を打ち出しました。そこに根差したものは徹底的なユーザー（消費者）の視点であり、人々が楽しむもの、面白いものを追い求めたバイタリティーにあるといえるでしょう。

本展では、大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」(NHK)とも連携し、蔦重が創出した価値観や芸術性がいかなるものであったかを体感いただきます。

※詳細は別紙プレスリリース参照 音声ガイドナビゲーター：横浜流星

会場：東京国立博物館 平成館

会期：2025年4月22日(火)～6月15日(日)

※会期中、一部作品の展示替えを行います。

開館時間：午前9時30分～午後5時

※毎週金・土曜日、5月4日(日・祝)、5日(月・祝)は午後8時まで開館

※入館は閉館の30分前まで

休館日：月曜日、5月7日(水)

※ただし、4月28日(月)、5月5日(月・祝)は開館



上：『箱入娘面屋人魚』(部分) 山東京伝作 寛政3年(1791) 墨摺小本 東京国立博物館蔵 ※会期中、頁替えがあります。

右：『婦女人相十品 ポッピンを吹く娘』(部分) 喜多川歌麿筆 寛政4～5年(1792～93)頃 大判錦絵 東京国立博物館蔵 (前期展示:4/22～5/18)

江戸大奥

特別展
SPECIAL EXHIBITION
ŌOKU: WOMEN OF POWER IN EDO CASTLE

大奥ときくと、選ばれた女性たちが、豪華絢爛で美麗を尽くした衣装をまとい、優雅に暮らす様子を思い浮かべることでしょう。しかし、厳格な制度としきたりの中、将軍の世継ぎを生み育て上げるというプレッシャーの中での生活は、想像するような華やかで美しいものではなかったはずです。

将軍の妻である御台所や側室、そこに仕える御殿女中の歴史をたどると、時にその権勢を振るい、時に締め付けに遭いながら生きていた女性たちの栄枯盛衰がみえてきます。その一方で、彼女たちは閉ざされた生活の中でも喜怒哀楽を享受してきました。

本展では、大奥の歴史と文化を、衣装、道具など多彩な作品で紹介します。

会場：東京国立博物館 平成館

会期：2025年7月19日(土)～9月21日(日)※会期中、一部作品の展示替えを行います。

開館時間：午前9時30分～午後5時

※毎週金・土曜日、7月20日(日)、8月10日(日)、9月14日(日)は午後8時まで開館

※入館は閉館の30分前まで

休館日：月曜日、7月22日(火)

※ただし、7月21日(月・祝)、8月11日(月・祝)、9月15日(月・祝)は開館



左：『千代田の大奥』より「千代田大奥 御花見」楊洲周延筆 明治27年(1894) 東京国立博物館蔵 ※会期中、展示替えがあります。

中：重要文化財 刺繍掛袱紗 浅葱織子地杜若と撫子に酒器「長生」字模様 徳川綱吉が瑞春院(お伝の方)に下賜

江戸時代・17～18世紀 奈良・興福院蔵 ※会期中、展示替えがあります。

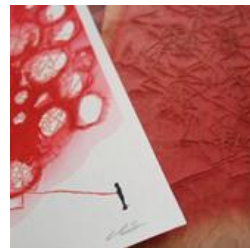
右：掻取 紅輪子地流水花折枝模様 貞恭院(種姫)所用 江戸時代・18世紀 東京国立博物館蔵

ARTISTS RE-WORKING
THE TRADITIONS OF WOODCUT PRINTS

UKIYO-E
IN PLAY

浮世絵現代

左：ロッカクアヤコ《無題1》2020年 木版
©AYAKO ROKKAKU
中央：加藤泉《無題3》2023年 木版 ©2023 Izumi Kato
右上：木版画の制作(彫り)(作品：ジェームス・ジーン
《Chrysanthemum》2021年)©James Jean
右下：塩田千春の木版画と版木
(作品：塩田千春《Connected to the Universe
- Red Circles》2023年)
©JASPAR, Tokyo, 2025 and Chiharu Shiota



日本の木版画の技術は、江戸の文化の中で高度に発展し、浮世絵という芸術を生み出しました。「浮世」という言葉には「当世風の」という意味があり、その時代と社会を色鮮やかに映し出すメディアでした。

本展は現代まで受け継がれた伝統の木版画の技術を用いて、総勢約80名を超える国内外のアーティストたちが、アダチ版画研究所と協働して制作した「現代」の「浮世絵」をご覧ください。

現代から未来につづく伝統の可能性に触れる貴重な機会です。

タイトル：浮世絵現代

会場：東京国立博物館 表慶館

会期：2025年4月22日(火)～6月15日(日)

開館時間：午前9時30分～午後5時

※毎週金・土曜日、5月4日(日・祝)、5日(月・祝)は午後8時まで開館

※入館は閉館の30分前まで

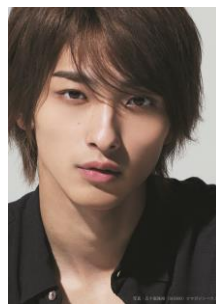
休館日：月曜日、5月7日(水)※ただし、4月28日(月)、5月5日(月・祝)は開館

同時期開催の特別展「蔦屋重三郎」(平成館)または「イマーシブシアター 新ジャポニズム」(本館特別5室)の観覧券をお持ちの方は、観覧当日に限り本展覧会を無料でご覧いただけます。

【主な参加アーティスト】

草間彌生、横尾忠則、田名網敬一、加藤泉、塩田千春、名和晃平、ロッカクアヤコ、花井祐介、李禹煥、アントニー・ゴームリー、キキ・スミス、N・S・ハルシャ、ニック・ウォーカー、アレックス・ダッジ、ジェームス・ジーン 他多数参加

高さ7m巨大モニターで鑑賞する日本の至宝！新感覚の没入体験！



ナビゲーター：横浜流星

写真・五十嵐隆裕(SINGO)
©マガジンハウス

はるか1万年以上前から、日本の風土の中で、独自の美意識が受け継がれてきました。

縄文土器、はにわ、絵巻、鎧兜、浮世絵、さらには世界で人気のアニメまで。

NHKの高精細映像と技術を結集したイマーシブシアター「新ジャポニズム」。東京国立博物館所蔵の国宝や重要文化財を中心にした日本文化のタイムトラベルをお楽しみください。

タイトル：イマーシブシアター 新ジャポニズム ～縄文から浮世絵 そしてアニメへ～

会場：東京国立博物館 本館特別5室

会期：2025年3月25日(火)～8月3日(日)

開館時間：午前9時30分～午後5時

※毎週金・土曜日、5月4日(日・祝)、5日(月・祝)、7月20日(日)は午後8時まで開館

※入館は閉館の30分前まで

休館日：月曜日、5月7日(水)、7月22日(火)

※ただし、3月31日(月)、4月28日(月)、5月5日(月・祝)、7月21日(月・祝)は開館